

第1章

ライフヒストリー研究の展開

1 ライフヒストリーのストーリー

——ライフヒストリー法の起源

ライフヒストリー法の起源を探ると、二〇世紀の初めに文化人類学者がアメリカ・インディアン酋長の自伝という形で最初のライフヒストリーを収集していることがわかる（たとえば Barrett 1906, Radin 1920）。それ以後、研究手法としての普及や受容には盛衰があったものの、ライフヒストリー法による研究は社会学者や、そのほかの人文科学で活動する研究者によって行われることが多くなった。本書で指摘しているようにライフヒストリーやそのほかの自伝や語り⁽¹⁾を用いる手法が多く^{ナラティブ}の成果をもたらすと考えられるようになり、教育研究においてもこうした手法が用いられるべきだというのが本章の主張である。しかしながらこの手法の研究上の来歴を辿ることで、これまでの社会学研究でいかにライフヒストリー法が用いられてきたのかを検討しなければならない。というのも社会学こそライフヒストリー法が発展してきた主要な「戦場」であったからだ。

社会学者にとってライフヒストリー研究発展の重要な画期は、トーマスとズナニエツキの壮大な研究『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』（Thomas and Znaniecki 1918-1920）に続き、1920年代に訪れた。アメリカに移住したポーランド農民の経験を検証する際に、ト

(1) 日本でも女性やマイノリティの研究のほか、最近では教師、看護師、ソーシャルワーカーなどの専門職、企業家や経営者などについてライフヒストリー研究がさかんに行われるようになっている。

